

インターネットがこれほど普及し、便利になろうとも私達の生活に、新聞と雑誌が不要になることはないであろう、というのが私の主張である。

これを証明する、アメリカで90年代に行われた有名な調査がある。これは「ジョージ・W・ブッシュ大統領をどのような手段で知ったか」というもので、テレビが普及したこの時期、ブッシュの暗殺された、その映像が連日連夜テレビでセンセーショナルに放映されたため、アメリカのテレビ関係者は、ほとんどのアメリカ人がテレビで、この世紀の大事件を知ったのだらうと、考えていた。しかし、実際は回答者の八割が、「翌日の新聞で知った」「人から聞いた」と回答したのである。

同じような事例が2001年の9.11テロでもあった。インターネットで知ったと答えた人はごく少数で、大部分の人が、やはり「人づてに聞き、テレビ・新聞で詳細を知った」と答えたのである。インターネットがはり

めぐらされた世界においても、依然として人はその情報源をローカルネットワークに頼りきっているのである。

以上のことから言えるのは、インターネットが新聞や雑誌に取ってかわると主張する人達が論拠とする、インターネットの即時性などで全く何の意味もないということである。確かに、無料で情報が得られるインターネットやテレビに比べ、新聞は劣っていると言わなければならない。今後、これらのメディア界で課金制の見直しはあるだろう。しかしながら新聞や雑誌がインターネットに比べ即時性があるという理由だけで、不要になるということにはありえない。そうであるならば、手紙も年賀状も電子メールに取って代わられ、不要ということになる。

社会がこれだけグローバルになろうとも、ヒトは本質的にローカルな生き物であり、そうである限り、自分の手に取って何かを読み情報を得るという行為はなくなるないだろう。